

東田、上位進出へ闘志

陸上男子100メートル五輪代表

パリ五輪陸上男子100メートル標に掲げた。「自己ベストを2位に食い込み、五輪切符をの日本代表に初めて内定した出せれば準決勝を狙える」と、勝ち取った。タイムは3位と東田旺洋(28)＝関彰商事＝が上位進出へ静かな闘志を燃や10日、母校の筑波大(つくば)市)で取材に応じ、自己ベスト 五輪代表選考会を兼ねた6月30日の日本選手権。東田が「た」と振り返る。



自己ベスト更新を狙う

奈良県出身で、小学6年の時に陸上を始め、奈良市立一条高から筑波大に進学した。同大学院時代の2019年には全日本インカレで優勝。昨年から海外の大会にも出場し、経歴を積んでいた。

実はこれまで肉離れを十数回経験、けがに悩まされた競技生活を送ってきた。その反省から、筑波大で学んだスポーツ医学や栄養学の知識を基に肉体を強化。体も一回り大きくし、「足に負担をかけない効率的な走り方ができるようになった」という。

現在は所属する関彰商事で働きながら、筑波大で週5回練習に励む。指導してきた同大の谷川聡准教授(52)は「条件さえ整えば9秒台は出ると思う。今までやってきたことを生かし、無心で走ってほしい」と活躍を祈る。

大学時代にあった16年のリオデジャネイロ五輪、3年前の東京五輪と、夢の舞台はいつもテレビで観戦する遠い存在だった。東田は「アスリートにとって五輪は特別な舞台。だが、気負わず自分の走りに集中したい」と話した。

(今橋憲正)

●パリ五輪に向けて意気込みを語る東田旺洋を練習に励む陸上男子100メートルの東田旺洋＝つくば市の筑波大陸上競技場